

漢法苞徳塾資料	No. 115
区分	疾病論・病因
タイトル	積聚をめぐって
著者	八木素萌
作成日	1994.01

- a. 腹腔内に生じている病変が示している腹部体表での反応表現が積聚と呼ばれている。

腹部におけるこの反応を「積聚」と呼んでいるのが『難経』である。『内経』には、腹部の病候を表現する「疝・瘕・癖・疝・鼓・腫・脹・瘍」などの語が見られる。『難経』はこれらの変化を「陰」と「陽」に区分したうえ、「ひとくくり」にして「積＝陰・聚＝陽：積聚」して記述した。

後代の医書にも、「積聚」の語と「疝」や「癖」「瘕」などの語も見られるが両書の影響が強い。これらは「同義」とまで書いているものさえ見られるが、腹部の変化を陰陽に分類して、概括した記述をしているのが「積聚」と言う記述であり、種々に区分して症候を記述したものが「疝」「瘕」「癖」その他と見ることが適当である。

『難経』は陽性の変化については単に「聚」としているのみである、陰性の変化については「積」として五臓論的な分類を行ない、その「診断論」を詳しく記述している。

- b. 突然に「聚」や「積」が起こるのではない、必ず或る経過が問題。

例えば「胃脘瘍」や「腸瘍」には「口苦」「噎」「噦」「吃逆」「飧泄」などのような症候を伴っているのを見るし、これらの症状は「胃・瘍」などの前兆としても表われる。そして、この「胃脘瘍」は「胃聚」として腹診できたり、あるいは「脾積」や「心積」として蝕知されるようになる。

「胃痞」や「結胸」などが「胃瘍」の前段階の病証として表われる場合も無視できない。

- c. 腹症を引き起こす「邪」と、それが入客する経路と、経過に相応した病候が問題にされなければならない。
- d. 外感病のうちの（傷寒）の場合
- e. 外感病のうちの温病（風・風湿・湿熱）の場合
- f. 飲食の問題
- g. 内傷の気鬱……内風・燥……別の角度からは…飲・痰・瘀……の問題
- h. 腸胃への経路と胞への経路の区分（邪の入客する経路）
- i. 便痛（2便）疎通（脈絡）理血（温血・活血・滑血・疎血）＝刺絡・透鍼・その他の技法